４５．町田　そのこ氏（北九州市文化大使）

「これからもいろいろな文化が生まれる。今後も文化を守り、育つまちであってほしい。」

©中央公論新社

町田　そのこ（まちだ　そのこ）
福岡県在住。
「カメルーンの青い魚」で「女による女のための R-18 文学賞」大賞を受賞。また、「52 ヘルツのクジラたち」で本屋大賞を受賞し実写映画化。他著書に「ぎょらん」「うつくしが丘の不幸の家」「コンビニ兄弟-テンダネス門司港こがね村店-」「星を掬う」「宙ごはん」などがある。

「若者が育つ環境を引き継いで」

大人になってから感じたことではありますが、企業の力や地に根付いてきた産業が引き継がれていき、そこから新しい文化が生まれるということが続いていくと良いのではないでしょうか。

青春時代を過ごした中で感じた、引き継いでほしいところは、「人の温かさ」です。美容学校を出たので、市内の美容室で働いた経験がありますが、年配の方が若者をきちんと指導してくれました。後進を、若者を育てようという気質があるとすごく感じました。

若者が育つ環境としての北九州市の魅力は、普段生活している場所から路地一本離れたところで文化が生まれているところだと思います。興味のきっかけになる場所が散らばっています。若者に自分たちのまちが、文化や素晴らしい作品を生み出している場所であることを知ってもらえたら嬉しいですね。

「地元を盛り上げる姿勢は素晴らしい」

北九州市は映画化された「52 ヘルツのクジラたち」でもロケ地になりました。フィルムコミッションの皆さんに協力いただいて撮影が順調に進んでいきました。地元の方と映画班を組み、ロケ地を探し回って、私の想像通りであるかを丁寧に確認してくれました。

ロケの際は、古民家に行った時も、女優さんやスタッフさんへ、パンを大量に用意してくださるなど、映画を作ることにとても協力的であるところに感動したのを覚えています。このように、物語や文化をこれからもどんどん作っていくまちになってほしいです。

私の作品の中で北九州市を舞台にしたものが多いのは、当初は取材費が浮くから地元で書いた、というのがきっかけです。小説「コンビニ兄弟−テンダネス門司港こがね村店−」は門司が舞台になっていますが、北九州市でとても売れていると聞き、地元の方に愛されているのだと感じました。今では、物語を書くことで、もっと北九州市を盛り上げることができればと考えています。小説を書くにあたって、地元の方が応援してくれているという安心感がありますし、地域の方々の地元を盛り上げようとする姿勢は本当に素晴らしいと思っています。

「魅力的で明るいまち」

今、北九州市の隣町に住んでいますが、地元の方の応援を受けられるというのも大きな理由です。昔は「都会に出ていきたい」と思っていましたが、作家として北九州市を見たときも、食べ物や、観光名所、歴史ある市場、魚町のアーケードなどなど、魅力的なものがたくさんあると思います。

幼少期の北九州市のまちと比べると、とても明るくなったように感じます。昔は歩くのに緊張するまちでしたが、気楽に楽しく歩けるまちになっています。子どもも連れて行けるまちにもなっているのではないでしょうか。東京から知人が来たときも、「ここだけは連れて行きたい」という店があり、自分の手柄ではないのに誇らしくなるほどです。

「文化を守り、育てるまちにしてほしい」

北九州市は、漫画から映画まで、文化を幅広く内包しています。今後もこれまでの文化に加え、新しい文化も守っていけるまちであってほしいと思います。

北九州市を取り上げる作家が増えると良いですし、映画などでも北九州市を舞台となると良いのではないのでしょうか。聖地巡礼にもつながりますし、物語のまち、というのも良いと思います。

北九州市でのオールロケの映画「レッドシューズ」では、どのシーンもとても絵になっていました。どの場所を切り取っても良いまちで、映画のロケ地としてのポテンシャルを改めて感じました。

文化では他にも、北九州市立文学館では林芙美子文学賞なども開催されていますし、もっと周知されていくと良いのではないでしょうか。審査員には、川上未映子氏など、著名な方が名を連ねています。すでに文学が生まれている場所ではありますが、もっともっと文学が生まれてくると良いですね。

これからもいろいろな文化が生まれてくると思います。文学を生み出す人はこのような賞から生まれることもあるので、文化が育つまちとして、今後も取組を大きく広げてほしいと願っています。